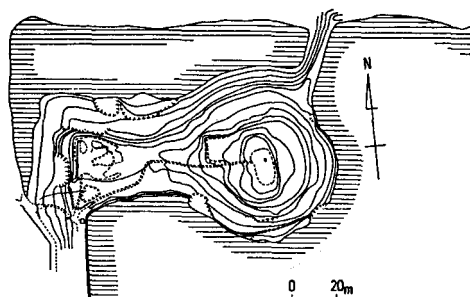


# 黒塚古墳と三角縁神獸鏡

別府大学名誉教授

賀川光夫

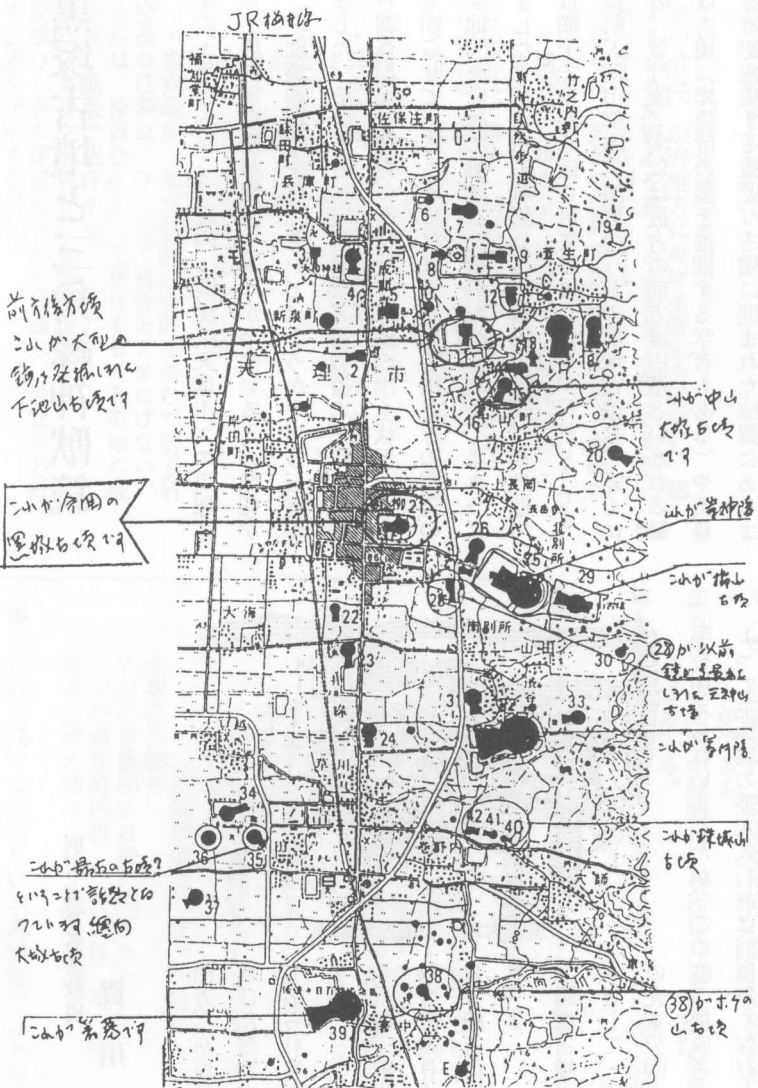
昨年の十月ごろから、畿内（奈良県天理市）の黒塚古墳から三角縁神獸鏡が数多くみつかっているとの情報が入り、一度調査現場を見ておいてはどうかという伝言がありました。そのうちに関西大学名誉教授の網干善教先生から調査現場、調査の進行状況、鏡の出土状況などが電話で知らせてくるようになり、黒塚古墳とその周辺の状況を地図を含めて解説した資料も贈られてくるようになりました。皆さんにお配りした数枚の地図、その他の資料は網干先生から送られてきましたもののコピーです。奈良県天理市柳本古墳群のうちの黒塚古墳は、近くに崇神陵、景行陵、南には最古の前方後円墳といわれる纏向大塚古墳（卑弥呼の墓と推理する学者もある）や箸墓古墳などが密集する重要な古墳に囲まれた位置にあります。『奈良県の文化財』に紹介された黒塚古墳によると



黒塚古墳 墳丘実測図

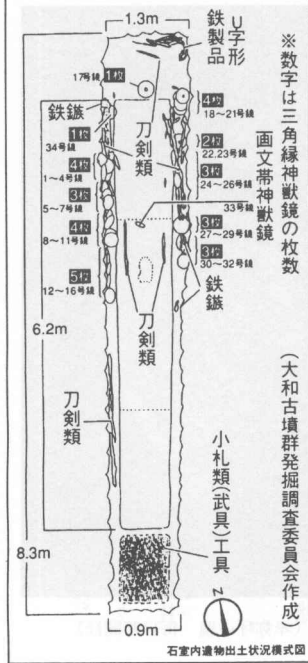
西方、奈良盆地の方向に延びた台地の端を利用して造られた前方後円墳で、全長一三〇呎（後円部径七五呎、前方部の幅六〇呎）でありますから、大きな前方後円墳であります。

黒塚古墳は近世には陣屋として、近くは柳本町の児童公園として何度も手を加えられましたが、この度の橿原考古学の調査によって主体部の竪穴式石室は損傷無く保存されていることが分かりました。



大和古墳群の古墳分布図（網干先生記）

# 石室内出土状況図



資料をごらんください。調査委員会が製作しました石室の見取り図です。竪穴の長さ八、三<sup>たてあな</sup>と長く、幅は北側(頭部)が広く、それでも一、三<sup>たてあな</sup>ですから長く細い石室です。その中に長さ六、二<sup>たてあな</sup>の竹を割ったような形の木棺(割竹式木棺)があります。この長く細身の竪穴式石室と割竹式木棺の主体部を畿内型とよびます。

この図には副葬された遺物が記入されていますが、そのなかで注目されるものが青銅製の鏡です。鏡は三角縁神獸鏡が目立ちます。石室と木棺の間に被葬者(納められた人)を照らし出すかのように鏡の表面を棺の方向にして、左に一七面、右に一五面、頭部に一面合計三三面

の三角縁神獸鏡が発見されました。

それとは別に、棺内の中央に画面帯神獸鏡(内区の神獸文の外側に帯状の神獸文がある)が一面発見されました。石室と木棺の間に、内向けに並べられた三角縁神獸鏡と石室内部中央の画面帯神獸鏡の違った方法での出土状況について先ず問題があると思いますが、これについては後に述べます。

まず、三角縁神獸鏡について述べたいと思います。この鏡の特徴は、

- 一、大きさが平均して二三<sup>センチ</sup>位の大型鏡であること
- 二、鏡の縁の断面が三角形になること
- 三、内区(主な文様のあるところ)の文様に神像と獸像をいくつかの形式に分類して配置されること
- 四、なかには銘帯(文字を刻んだところ)があり、文章に次のような特徴がみられます。

A、陳とか張は作者の名前で、日本人には無い人物が作ったとする文字「陳是作鏡」などが書かれていること



出土した三角縁神獸鏡 (卑弥呼の鏡 毎日新聞社)

B、鏡を作った中国の年を年号で現(紀年鏡)わして  
 てること、例えば「景初三年」などの文字が彫り  
 込んでいる。

C、文章には吉祥に関する文字

「渴飲玉泉飢食棗」「寿如金石」

などが書かれていることなどが注目されます。

ここで注目されますのは「景初三年陳是作鏡」や「正  
 始元年陳是作鏡」など中国三国時代、魏の年号と作者の  
 文字が書かれている鏡が何枚も発見されていることです。  
 この銘文から三角縁神獸鏡は魏国の鏡で、『三国志東夷  
 伝』にみえる「献：銅鏡百枚」にあたり、魏代に交流の  
 あったのは畿内(邪馬台)であると考えることができるこ  
 とになります。

また、大阪府茶臼山古墳から出土した三角縁神獸鏡の  
 文章には、

「銅出徐州 師出洛陽」

(銅は徐州から産出し、技術者は洛陽にいます)

とあり、徐州と洛陽の地名を併記する時代は魏代に相当  
 しますので、三角縁神獸鏡は魏の鏡に間違いはないとい

ことになります。

この考えについても反論があります。日本の三世紀末から四世紀のころの前方後円墳から、大量に発見される三角縁神獸鏡不思議にも中国では一枚も見つかっていません。さらに銘文には、

「景初四年五月丙午之日 陳是作鏡……」

(福知山広峰古墳)

の文字の刻まれた鏡があります。景初という魏の年号は三年で終わっていて四年は正始元年になります。この二つのことなどから三角縁神獸鏡は、中国の舶載鏡ではなく、わが国の仿製鏡(国産)であるとして反論していません。このように邪馬台国論争の重要な論拠に三角縁神獸鏡がありますので、鏡の大量出土は問題になります。

さて、三角縁神獸鏡の大量出土の例として京都市椿井大塚山古墳の三二面が最大でした。黒塚古墳は一面多く三三面ですから目下最多の出土といえます。

しかし三角縁神獸鏡以外の鏡を含めて同時に出土した鏡の数は椿井大塚山古墳、奈良県宝塚古墳の三六面、奈良県新山古墳の三四面と黒塚古墳は同数であります。

ここで一つの問題が生まれました。黒塚古墳では石室と棺の間に鏡を内に向けて立たせていたことが明らかになりました。これまでも椿井大塚山古墳をはじめ多数の三角縁神獸鏡出土の古墳では石室と棺の間に鏡を立たせていたということが明らかにされてきました。これらは棺(被葬者)に光を当てるように鏡の表面を棺側に向けて立てていたと解釈できます。また棺の中央、遺体の上半身と思われる付近から、画文帯神獸鏡が一面発見されています。この棺の中央の鏡を囲むように三角縁神獸鏡が棺外に立てられ表面を内にむけているのは意味がありそうです。

中国では鏡は化粧具で、しかも多くは手鏡として使用されています。大きさも直径が一三〜一四センチと小さいサイズです。黒塚古墳の棺の中央の画文帯神獸鏡は二三、五センチで、この鏡は文様を始め特徴から後漢ないし三国時代初期の鏡と判断されます。これに対して石室と棺の間



棺内に納められた画文帯神獸鏡  
(黒塚古墳 学生社)

に立てられていた三角縁神獸鏡は二二〇、二五センチと大きく、重さは一、二キロもありました。これは化粧具としてはとても重くて用をなさないと思います。そう考えると三角縁神獸鏡は別の用途、つまり葬具としての呪術的要素があつて大きさや重さに意味があつたものと考えられます。中国にもそのような意味で鏡を呪術につかつた例があります。前漢、後漢時代には奩（鏡をいれる箱）に鏡を入れて鏡面を顔のうえに被せ、光で遺体を照らせば遺体は安泰であるという用い方です。

それにしても黒塚古墳はじめ、三角縁神獸鏡の数は多すぎます。そこで考えられるのは重要人物の葬儀に葬具

一式を大王が身分に応じて贈る習慣があつたことでもあります。この方式があるとするれば、鏡の光は呪力を持つものであり、数の多さは身分の高低に関係があるのかも知れません。このように考えると訃物として高い地位にあつた者の葬儀一式に下賜されるものと考えられます。そう考えると、前方後円という畿内系古墳にあつて、鏡の数の大小は身分の高低を現し、黒塚古墳や椿井大塚古墳などは畿内政権の中で重要な人物となります。

三角縁神獸鏡を以て魏鏡とし、京都学派がそう考えている学者を「信頼できも考古学者」といっていますから、三角縁神獸鏡三三面出土の黒塚古墳は邪馬台国の高級官僚クラスの人物の墓ということになるでしょう。

ここで棺の中央から見付かつた画文帯神獸鏡（画文帯盤龍座乳神獸鏡）は間違いなく後漢か三国時代初期の鏡であると思われます。大きさは径一三、五センチ、重さ三三六ギ、銘文に

「吾作明鏡自有紀□□公宜子」

とあり、内区の文様の神仙に東王父、西王母を内向きに、

伯牙と皇帝？は外向きに配し、神獸には盤龍を配しています。また銅に対して三〇位の錫が含まれていると見られ、白銅質に見えるのは明かに舶載鏡と見て良いでしょう。この画文帯神獸鏡は三角縁神獸鏡と用途の違った扱いをしていることが注目されます。

最後に畿内を中心とする前方後円墳に副葬される三角縁神獸鏡の大量出土が邪馬台国論争の鍵を握るということは問題が多いと思われれます。反論の指摘、すなはち中国で一枚の出土もない三角縁神獸鏡、ありもしない（あつてはならない）景初四年記年鏡など邪馬台国論争にはまだまだ問題があります。

『魏志東夷伝』の「銅鏡百枚」は中国で流行した後漢、三国時代の内行花文鏡や方格規矩四神鏡などであるかも知れませんが。これらの鏡の大量出土は北部九州に集中しており、これを畿内の三角縁神獸鏡と等間において議論しなければなりません。九州における後漢、三国時代の鏡の大量出土は次のようになっていきます。

福岡県前原市有田平原遺跡 三五面

後漢・三国時代前期（うち方格規矩鏡三二面）

福岡県前原市井原鍵溝遺跡 二一面

同前（すべて方格規矩鏡）

これらは一つのカメ棺から同時出土で、全て魏代の交流と見てよいと思います。更に、前漢鏡を主体として出土した遺跡としては、つぎの遺跡があげられます。

福岡市須玖岡本遺跡 前漢時代 三三三面

前原市三雲遺跡 同前 三五面

この二遺跡もカメ棺からの同時出土で、前漢書地志の「倭人百国」に関係かあると思われる時代の舶載鏡であります。これら前漢、後漢、三国時代の鏡の出土は、中国との交流を滑らかに証明できる資料です。しかもこれら中国鏡の出土は『三国志』魏書の伊都、奴国にあたり興味を惹かれます。

邪馬台国九州説も三角縁神獸鏡と同じように後漢、三国鏡に注意するならば、これらは同じ立場で議論されなければならぬと思います。